

ITOSUGI

いとすぎの丘



入学式



イギリス語学研修



卒業式

開学式の様子

Pick Up



平成16年に開学した日本赤十字豊田大学は今年10周年を迎えました。

11月には開学10周年記念式典も予定されています。今号では、10年に渡って本学の運営に携わってきた教職員の思いを掲載しています。

■ 卒業式・入学式特集

■ 学生生活

カンボジア国際保健医療支援実習

イギリス語学研修

実習体験

RCT☆LINK

■ 大学の活動

【10周年記念】10年を振り返る

Academic Library

研究の窓

■ Information

卒業生・新入生のみなさんへ

学長 安藤 恒三郎

2011年3月の東日本大震災および福島原発事故から2年が過ぎました。現在も多数の方が避難生活を余儀なくされていることに心を痛めます。全国の赤十字医療施設では、発災直後から、本学の教職員を含め約5千人の看護師・医師などが被災地に入り救護活動を行いました。復興事業が継続されていますが、本学の学生は昨年も自ら手を挙げて被災地域でボランティア活動を行っています。「人間を救うのは、人間だ!」という赤十字の人道精神そのものでした。

卒業生・修了生のみなさん卒業おめでとう。

大学院修了生のみなさんは、仕事を続けながら研究論文に取り組むという厳しい環境の中で、立派な成績をあげられましたこと、心からお祝いをします。今後それぞれの専門分野の指導者として、医療現場で活躍されることでしょう。また、将来本学の教員として戻ってきていただける方が出てくることを期待しております。

看護学部卒業生のみなさん、社会人1年生の看護師として、これから辛いことや苦しいことに向き合うこと



がきつとあるでしょう。その時は、詩人柴田トヨさんの詩、「くじけないで」を思い起こしてください。「陽射しやそよ風はえこひいきしない。夢は平等に見られる。あなたもくじけないで」

そして、新入生のみなさん入学おめでとう。

大学院に入学されたみなさんは、すでに看護師として社会で活躍されています。その多忙な日々の中にも向学心を失わず大学院に進学されたことに敬意を表します。立派な成果を出されることを確信しております。

看護学部に入学生されたみなさん、本学は赤十字精神を身につけた看護専門職を育てる大学であり、看護学を通じて生涯を貫く感性・知性を磨き育てる学び舎です。成人病を生活習慣病と呼ぶことを提唱し100歳を超えてなお現役で活躍されている日野原重明医師は、「良い習慣はあらゆる可能性の下準備だ」と述べておられます。大多数のみなさんは在学中に成人になります。成人とは自分の行動に責任を持つことであり、教えられるのではなく自ら学ぶことが基本となります。大学生活はどうあるべきか、自分自身でよく考え、大学生としてぜひ良い習慣を身につけてください。そして、学生生活を充分楽しみ、いろいろな人との繋がりを実感し、人間性に磨きをかけてください。

卒業式



考えることの大切さ

第6期卒業生 前橋 孝充

4年間の学習の中で特に大切だと感じたことは『有機的に考えることの大切さ』です。看護師になるために様々な講義を受け、多くの知識を獲得するために日々切磋していました。

実習では、講義で培った知識を元に看護を展開していかなければならないのですが、最初は学んだことを上手く発揮することができませんでした。そのため、学んだ知識を活用することが出来ない自分自身に対して、不甲斐なさを感じました。

それは、患者さんに起こっている現象を、点と点だけの結びつきだけで考えていたことにありました。そ



の結果、知識を詰め込むだけで、物事の本質を理解できていなかったのだと実感しました。

よい看護をするためにどうするかを悩んでいた時に、講義の中で先生方が「考えることが大切」と話していたことを思い返しました。患者さんに起こっている現象を点ではなく、いくつもの要素が密接に結びついて、互いに影響し合っているのだと念頭に置くことにしました。そうすると、少しずつ考えながら看護を展開できるようになりました。また、患者さんのことを考えながら看護を展開させていくことで新しい発見もあり、看護を学ぶことの楽しさも深まっていきました。このことから、有機的に考えることの大切さを学びました。

一緒に学んできた仲間や力になってくださった先生方、職員の皆様に支えられ、充実した大学生活を送ることができたことにとても感謝しています。今後は大学での経験を活かし、看護師として社会に役立つよう頑張りたいと思います。



修士課程を終えて今思うこと

看護学研究科 第1期修了生 村瀬 美直子

大学院の卒業を迎えるにあたって、思い出されるのは入学式の日のことです。「とんでもないところに来てしまった・・・」という思いが湧いてきて、震えるほど不安になったことを今でも鮮明に覚えています。そんな不安を抱えながら始まった大学院生活は、仕事と勉強の両立に悩み続ける日々でもありました。そして、もうそんなに若くなく体力も落ちてきている現実とも向き合いながら、歯を食いしばって走り続けてきた3年間でした。

修士論文の提出を終えた夜、一番ほっとする時間の



はずなのに、3年間で一番つらい気持ちになりました。「私は3年間何をやってたんだろう。得たものが何も浮かんでこない」。そんな、やり場のない感情でした。そんな中で迎えた修士論文発表会の日、安藤学長の「今日がゴールではなく、ここからがスタートです」の言葉に自分の心のもやもやがずっと晴れた感じがしました。この3年間はスタートラインに立つための準備期間だったのだと思うことができました。正直なところ、今はまだ修士課程の3年間の意義を見出すまでには至っていません。だからこそ、これから先自分自身が看護師としてどうあるべきかを考え、自らの課題を明確にして進んでいかなければならないと思っています。ここからがスタートなのです。

お世話になった諸先生方、苦しい中励まし合った仲間たち、支えてくださった全ての方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

入学式



無限の可能性を感じて

新入生 石島 里美

私は、日本赤十字豊田看護大学に入学し、赤十字や看護を学べるという環境にとっても感謝しています。昨年大きくニュースで取り上げられた日本人のノーベル医学・生理学賞受賞により、日本の科学技術の高さや粘り強く努力を惜しまず研究に取り組む前向きな姿勢が、世界中に発信されました。これらは医療において、こ



れからもまだまだ広がる無限の可能性を私たちに感じさせてくれただけではなく、その姿勢は完全復興を目指し日々現実と向き合い、闘っている東北地方の方々を震災直後から今なお継続的に支援されてきた赤十字関係者の活動と重なります。

損得を考えず、誰かのためにと一生懸命に行動を起こすことは、必ず相手に気持ちが伝わります。私たちも夢をかなえる自分のためではなく、支えてくださる周りの方やこれから先に出逢い救える命のために日々勉学に励みたいです。

また、刺激し合える仲間を見つけ、積極的に授業に参加していきたいです。

カンボジア国際保健医療支援実習

国際支援活動の実際

4年 大橋 理世

私たちは、カンボジア国際保健医療支援実習において様々な国際機関や医療施設を訪問しました。その中で、プレイベン州スバイアント郡でNGO団体であるSHAREの乳幼児健診活動の様子や村の視察に参加することができました。健診活動は、村の保健センターから職員が訪問し、保健ボランティアと協力して体重測定や予防接種、健康教育などを行います。中には、低体重で複数の病気をもつ子供もいて、医師の問診により適切な処置と母親への指導が行われていました。母親たちの言動からも、この健診活動が行われることに



よって、子供の健康に対する知識や安心を得ることができているのだと分かりました。

また、村の保健ボランティアや母親との交流の機会があり、村での生活のことや、母親たちにとって子供はどのような存在であるのかなど、生の声や言葉を聞くことができました。そしてなにより、母親たちや子供たちの笑顔がとても印象に残っています。

今回の実習で国際支援の実際を目の当たりにし、海外でたくさんの日本人が活躍していることや、支援を行う上では現地の方々との関わりが大切になるということが分かりました。

イギリス語学研修

イギリス語学研修に参加して

2年 倉光 紗恵子

私たちはイギリスの南西部に位置するプリマスでホームステイをしてきました。語学学校に通い、英国赤十字社や医療機関、現地の大学などを訪問して多くのことを学ぶことが出来たと感じています。自分の英語力でどこまでコミュニケーションが取れるのかという期待と不安を抱え出発し、当初は慣れない生活と語学の勉強に戸惑い緊張していましたが、親切なホストファミリーや現地の方、メイフラワーカレッジの友人や先生方に支えられ楽しく充実した日々を過ごすことができました。

語学学校だったためエクアドル、サウジアラビア、ブラジル、トルコなど様々な国籍の人と同じ授業を受けることが出来、



回答の正誤よりも発言することに意味があるという考えのアットホームな雰囲気でも楽しむことも出来ました。また、異文化に囲まれ、たくさんの



人と関わる中で、つたない英語でも伝えたい、理解したいという気持ちと笑顔で接することが大切であると考えるようになりました。

今回のイギリス研修では、多くの貴重な経験をすることができました。その中で特に、挑戦することであるものは大きく、自発的に行動すること、自分なりの考えや信念を持って主体的に行動することの大切さを実感しました。英語を使っていろいろな国の人と交流ができたことは自信にもなり、将来医療を通じて様々な国の人と関わっていきたいと思う気持ちがさらに強くなりました。そして夢に一步でも近づける様、向上心を持って勉学に励みたいと思います。

実習体験

多くの出逢いを大切に

4年 小林 里帆

3年生の後期から各論実習が始まりました。今まで学んできた、解剖学や病理学、心理学をはじめとする基礎専門科目や基礎看護学の重要さを感じる日々です。そして、自分の未熟さを痛感し、患者さんに何ができるのだろう、よりよい看護は何か考える日々でもあります。

実習では多くの出逢いがあります。出産で頑張るお母さん、生まれたばかりの赤ちゃん、「病気になって、他の人と違う経験が出来たのだから幸せだ」とおっしゃる方、在宅療養をしている方とその家族の方たち、...

命の大切さを肌で感じ、出逢った方たちの人生のほんのわずかの時間に関われたことに喜びを感じます。短い時間だからこそ、いまの自分に出来ることを精いっぱい提供したいと思うようになりました。

精神看護学実習では統合失調症の患者さんを受け持ちさせていただきました。何十年も入院されている方で、妄想、幻覚、独語があり、どのように接していったらよいのか戸惑っていました。実習グループのメンバーや指導者の方からの意見を踏まえ、患者さんの視線に自分の視線を合わせてみることで、どのようなときに嬉しい気持ち、楽しい感情、悲しい思い、寂しさ



母性看護の実習グループ



老年看護の実習グループ

を感じているのかを考え、それぞれの感情を共有するように接していきました。私がこの患者さんとの関わりで最も印象的だったのは、一緒に空を眺めたことです。患者さんの「外に出たい」というつぶやきがきっかけでした。患者さんと過ごす最後の日、病院側の配慮もあり、一緒に外に出て、雲ひとつない青天を眺めました。そのときの患者さんの満面の笑みは今でも忘れません。私はこの経験から、一緒に空を眺めることも看護のひとつであることを学びました。

実習で出逢った方たちとの貴重な時間は、私の一生の宝になると思います。今、この大学で仲間とともに勉学に励むことができることに感謝し、看護という学びを通して人間的にも成長していきたいです。

RCT☆LINK

震災復興支援ボランティアに携わって...

3年 望月 美紗貴

私がこの大学への入学直前の2011年の3月11日に東日本大震災が発生しました。地元を離れ新しい生活を始める目でした。

赤十字の災害看護や国際救援に興味があり本大学を志望した私にとって、この震災での赤十字の活躍はあこがれとなり、自分にも何かできないか、という想いが強く生まれました。

大学の先輩からの紹介で2011年の12月から学外の震災復興支援団体のボランティア活動に携わるようになり、これまでに被災地である岩手県、宮城県、福島県に足を運んできました。

震災から2年が経過した今、メディアでの報道も大きく減少し、震災が人々の心の中から薄れてきていることを日々感じます。

しかし、被災地では今でも避難生活をされている方、原発事故による放射能の被害を受けている方がいます。被災者の方とお話する機会があり、多くの不安、恐怖、葛藤を耳にします。被災者の方々が直面している数多くの問題は、大きすぎて自分に何ができるのだろ



う...と思うこともあります。しかし、その時々被災地のニーズに合わせて私たち大学生でもできることは沢山あります。大学生だからこそできることもあると知りました。

被災地の現状、抱えている多くの問題を少しでも多くの方に知って欲しいと思います。

「人道」、「奉仕」...これまで学んできた赤十字の精神を元にこれからも自分にできる形で復興支援に携わっていききたいと思います。

NEXT RCT☆LINK

⇒ 2年生 岩崎令美さんです。

【10周年記念】10年を振り返る

開学から10年間を振り返って

成人看護学領域 教授 東野 督子

今回、10年間を振り返って寄稿するにあたり、10年前の日本赤十字愛知短期大学から当大学へ引越したことを思い浮かべました。引越しに伴い多くはないけれど、いくつかの物品が当大学へ受け継がれました。その中には、国際赤十字・赤新月社連盟等の設立の基礎を築いたアンリ・デュナンの胸像や、貞明皇太后（大正天皇の皇后）の和歌の御歌「四方の国」が刻まれた石碑や、看護師がまさに歩み始める姿をした銅像や糸杉などがありました。日本赤十字豊田看護大学の学び舎で学んだ学生であれば、いずれの品々も身近に感じられていることでしょう。アンリ・デュナンの胸像は、管理棟1階の入り口に設置され、御歌「四方の国」が刻まれた石碑は講堂横の土台にあたる芝生に埋



「四方の国」石碑

め込まれています。看護師の銅像と糸杉は学生食堂の東側の庭に植えられています。短大の庭から移植された糸杉は2本ありましたが、これまでに1本は枯れてしまいました。しかし、残りの一本は、豊田の地に根付きました。この糸杉は、ただ単に受け継がれた樹木というのではなく、アンリ・デュナンが最初に活動したソルフェリーノ戦場跡に自生した糸杉の種から育った樹木の一つです。これは、1959年の赤十字思想100周年記念行事に関連して、かつての駐日イタリア大使から日本赤十字社社長に贈呈され、播種育苗でやっと育ったもの1つであり、日本赤十字愛知短期大学の校庭にあった樹木を村地俊二初代学長の尽力により、この地に移植されたものです。食堂でお昼をいただく時は、東側の庭が見える席に座り、糸杉を眺めて、10年根付いたんだなぁと思い、大学の背景の歴史に誇りを感じ



看護師の銅像と糸杉

10年間を振り返って

学務課 主事 青山 佳央理

ちょうど10年前の4月に開学式を行い、その翌日に大学第1期生の入学式が行われました。10年前は、まだ建物を建てたばかりの新しいにおいがし、机もいすもすべてが新品で、これから新しい大学の時代が始まるのだなと感じたことを覚えています。

私のこの10年の仕事を振り返ると、始めの5年はまだまだ就職して間もなかったこともあります。大学の基盤を作ることでただだ必死に、そして後の5年は少し落ち着いて、今大学で必要なことは何かと少し客観的にみながら仕事を進められたと思います。

私は「人が豊かになるお手伝いをする事」をmission

に働いています。大学では学生のために、大学のために。学生の皆さんとの直接の関わりは、日々の窓口や、オリエンテーションでの点での関わりあいかもしれませんが、大学の業務全般が学生の皆さんの学習、そして大学生活につながるものであると常に感じながら仕



大学祭「第1回糸杉祭」

事をしています。

この10年苦しいこと、楽しいこと、色々なことがありましたが、常に100%力を出してきました。そしてそのことがあったからこそ成長もさせていただいたし、100%で向き合った事によって、自分自身の新しい発見にもつながりました。昨日TBSの情熱大陸を見ていて、歌舞伎俳優の尾上菊五郎が、「(芝居で) ああ、なんとなくわかった。なんて思ったら終わり。」と言っていました。すべてにその事が言えると思います。日々勉強、日々成長です。これからも自分自身一生成長し、学生の皆さん、大学のために、働いていきたいと思っています。



第1期生入学式

Academic Library

“ベッド”と“シーツ”と“ナイチンゲール”

図書館司書 中尾 明子

このタイトルからあなたは何を連想するでしょうか？ 実は、昨年度から始まった本学の初年次教育を目標とした1年生むけの「看護ふれあいゼミナール」におけるWeeklyゼミナールを受け持たれた某先生の嘆きの言葉です。

大学におけるスタディスキルの一つとして、学術情報を集めるための文献検索は欠かせないのですが、その方法を学ぶ際に、看護に関するキーワードをどれだけ知っているか尋ねたところ、これだけだったというのです。某先生は日頃、3・4年生を教えていらっしゃるのに、1年生たちの知識も無垢な？状態に驚かれてし



春、新入生を迎える図書館



2012年度に購入した「The collected works of Florence Nightingale」(16vols)
(edited by Lynn McDonald, Wilfrid Laurier University Press, 2010-2012)
社会学の視点からナイチンゲールの著書を編集したとされ、カナダで出版された。

まったというわけなのです。ときは5月。

しかし、その1年生が後期で選択した「看護探求ゼミナール」の成果発表会では、成長した姿を見せてくれました。自ら選んだテーマに沿って、資料を収集し、学習を深め、感想ではなく自分の考えをレポートにまとめ、パワーポイントで発表を行ったのです。

2月、看護ふれあいゼミナールに少々関わりを持った図書館員も交代で会場をのぞくと、前のめりで聞いていらっしゃる多くの先生方の背がありました。会場は発表を見守る先生方の視線の温かさにあふれており、成長する学生と共に、成長する大学を想わせる光景がそこにあったのです。

研究の窓

看護師の「手」と「心」で行う技術

基礎看護学領域 准教授 前田 節子

入学して最初に学ぶ看護の専門科目、中でも私たち基礎看護領域が担当しているのは、看護援助の基本となる基礎看護技術です。従来、学内で基礎を学び、個人に合わせた応用は実習や各論でという考え方が主流でした。卒業後の1年目の離職原因の一つは、教育と臨床現場の乖離のためのリアリティショックとされています。私たち基礎看護領域は、この乖離をできるだけ埋めるように、学内教育の段階から、個人に合わせた援助を考え実施できる能力を育てることを目指して、日夜、頑張っています。とはいっても、初学者である学生が、すぐに技術ができるわけではありません。やはり、最初は模倣から入ることも必要となります。既成の視聴覚教材もありますが、臨床と乖離した内容が多いため、私たちは自作の動画を撮影し、学生たちが実習室で活用できるようにしています。今年度は、練習のための大型モニターも設置され、学習環境が充実します。

技術は、「頭でわかる」だけでなく、「体でわかる」「体がわかる」まで、練習を積み重ねる必要があります。十人十色、百人百様の対象一人ひとりに合わせた援助を考え、実践すること、そして何よりも看護実践の要となる「看護のこころ」、ナースィングマインドを育てたいと考えています。



基礎看護技術の様子

Information

平成25年度入学試験結果

入試区分	定員	志願者数	受験者数	正規合格者数	実質倍率	入学者数 ※補欠入学者含む
一般入試	50	482(52)	473(51)	140(7)	3.4	71(6)
センター利用入試	5	260(22)	259(22)	24(1)	10.8	1(0)
高等学校長推薦入試	30	57(6)	57(6)	30(2)	1.9	30(2)
日赤中部各県支部長推薦入試	30	38(2)	38(2)	38(2)	1.2	38(2)
社会人特別選抜入試	5	1(0)	1(0)	0(0)	0	0(0)
計	120	838(82)	828(81)	232(12)	3.6	140(10)

入試区分	定員	志願者数	受験者数	正規合格者数	実質倍率	入学者数
大学院入試	前期 10	5(0)	5(0)	5(0)	1.0	5(0)
	後期 若干名	4(1)	4(1)	4(1)	1.0	4(1)

※()内は男子学生数再掲。倍率は小数点以下第二位を四捨五入。

イベント情報（上半期）

●第10回いとすぎ祭

スペシャルゲストも登場予定！

開催日時：平成25年5月25日（土）

場 所：日本赤十字豊田看護大学内

内 容：各種模擬店、ステージショー、
健康チェック、非常食炊き出し
フリーマーケット・献血 他



昨年度の様子

●オープンキャンパス2013

開催日時：平成25年5月25日（土）※いとすぎ祭と同時開催

平成25年7月20日（土）10：00～15：00

平成25年8月24日（土）10：00～15：00

参加方法：ホームページ申込みフォーム

もしくは企画・地域交流課0565-36-5228まで
お電話ください。



平成25年度新任教員

教 授	村瀬 智子	精神看護学	講 師	千葉 朝子	母性看護学
教 授	永井 道子	地域看護学	講 師	清水美代子	地域看護学
准教授	大野 晶子	成人看護学	助 教	堀田由季佳	成人看護学
准教授	中村 裕美	成人看護学	助 手	南 祐子	基礎看護学
准教授	川島 美保	小児看護学	助 手	神谷 潤子	成人看護学
講 師	橋村 富子	母性看護学	助 手	仁田 瞳	小児看護学

平成25年度新任職員

事務局次長 兼総務課長 兼経理課長 兼図書館課長	永井 達也
学生・キャリア支援係長	山田亜由美

編集後記

「いとすぎの丘」Vol.17をお届けいたします。年度末の忙しいさなかご執筆をお引き受け頂いた皆様に心より感謝いたします。

大学の活動でご紹介しましたが本学は今年で、開学から10周年を迎えることができました。日本赤十字社をはじめ、看護学部を支えてくださる沢山の方々より、ご尽力いただきましたことを厚く御礼申し上げます。本学で開催される開学10周年記念式典は、2013年11月30日（土）に決定しました。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

いとすぎの丘 Vol.17

発行日／2013年5月

編集・発行／日本赤十字豊田看護大学

広報・公開講座委員会、企画・地域交流課



〒471-8565 豊田市白山町七曲12-33

TEL 0565-36-5228 FAX 0565-36-5256

E-Mail kikaku-ka@rctoyota.ac.jp

HP <http://www.rctoyota.ac.jp/>